

根室市議会議員 様

会派名 日本共産党根室市議会議員団

代表者名 鈴木 一彦

政務活動報告書

区 分	<input type="checkbox"/> 調査研究 <input type="checkbox"/> 研修 <input type="checkbox"/> 広報 <input type="checkbox"/> 広聴 <input type="checkbox"/> 要請・陳情活動 <input checked="" type="checkbox"/> 北方領土対策活動 <input type="checkbox"/> 会議
活動テーマ・目的等	北方領土返還要求中央アピール行動「アピール行進」
期 間	2023年12月1日
参 加 者 氏 名	鈴木 一彦 ・ 橋本 竜一
応 対 者	元島民ら返還運動関係者等 約500名
場 所	日比谷公園野外音楽堂 ～ 鍛冶橋交差点 付近
行 程	11/30根室→12/1東京→12/2根室
内容・成果等	<p>2023年12月1日、「北方領土」問題を全国民に発信し、国民の関心や世論を盛り上げようと、元島民をはじめとして全国各地から返還運動関係者らが都心部でアピール行進を行いました。北方領土隣接地域振興対策根室管内市町連絡協議会(北隣協)が主催し、今回で16回目の開催。主催者発表で約500名が参加されました。</p> <p>日比谷大音楽堂で行われた出発式では、北隣協会長の石垣雅敏根室市長は「人道的見地から行われた北方墓参もできなくなるなど、時計の針が大きく戻るような事態。長期化とともに北方領土問題が置き去りにされ、関心が薄れていくことを懸念する。人道的見地から一刻も早く北方墓参の再開を果たすことが私たちの悲願」と挨拶しました。</p> <p>元島民代表の決意表明では択捉島出身の鈴木咲子氏が「望郷の念も叶わず他界した多くの同胞たちの墓前に吉報を伝える日まで、返還要求運動の火を消すことなく邁進する。この無念の思いを希望に変え、みなさんと共に北方領土問題の早期解決の声を上げ、力強く行動する」と宣言しました。</p> <p>国会や道議会と重なり、内閣府特命担当大臣(沖縄北方担当)などは出席されませんでした。また道議会の日程とも重なり北海道知事も出席されませんでした。</p> <p>アピール行進では参加者が「北方墓参を早期に再開しよう」「北方領土交渉を再開しよう」などメッセージを記したハチマキや小旗を掲げて、1.6kmの道を「北方領土を返せー！」等と東京の大勢の人々にアピールしました。</p>



根室市議会議長 様

会派名 日本共産党根室市議会議員団

代表者名 鈴木 一彦

政務活動報告書

区 分	■調査研究 □研修 □広報 □広聴 □要請・陳情活動 □北方領土対策活動 □会議
活動テーマ・目的等	福山市立常石ともに学園におけるイエナプラン教育の取り組みについての視察
期 間	2023年11月21日～11月23日
参 加 者 氏 名	鈴木 一彦 ・ 橋本 竜一
応 対 者 (講 師 等)	下記および別紙の通り
場 所	福山市立常石ともに学園
行程 (別紙も可)	別紙の通り
内 容 ・ 成 果 等	<p>福山市立常石ともに学園は公立学校ではじめての「イエナプラン教育」の認定校。近年、根室市立花咲港小学校ではインクルーシブ教育をめざし、イエナプラン教育の考え方を取り入れた教育実践に取り組んでいることから、その内容について学ぶため視察をおこなった。</p> <p>開校する2年前から試験的に旧常石小学校では異年齢集団による教育を取り入れ、2022年度に常石ともに学園として新規開校。ただしオランダのイエナプラン教育をそのまま行うのではなく、「福山100NEN教育」として市内全小中学校等で目指している「子ども主体の学び」を実践するために、イエナプラン教育の理論を取り入れて、常石ともに学園ならではの「学び」を作っていきたいとしている。</p> <p>常石ともに学園で取り組まれている実践内容は割愛するが、常石ともに学園あるいは福山市における教育の特徴として、</p> <p>①福山市教育委員会は2016年から「福山100NEN教育」として市全体で「自ら考え学ぶ授業づくり」という教育のビジョンを掲げ、そうした中で各学校で独自の取り組みが進められていること。</p> <p>②イエナプラン教育はそのための手法の一つであること。ただしその特徴である異年齢集団によるグループ編成や対話・遊び・仕事・催しという4つの基本活動に基づいた実践を進める上で、教員が子ども達の学び方や各授業をどのように作っていくのかについて、常に職員同士でも対話しながら、試行錯誤を繰り返していること。</p> <p>③また学校長が中心となって、それぞれの授業の内容を動画データやペーパーで共有し、教員同士で互いに理解を深めていること。</p> <p>④そしてそれは学校内だけでなく、各学校が校長会による研修などを通じて、それぞれの授業内容を共有して、教育活動の推進をはかっていること、が大きな特徴ではないかと、本視察を通じて受け止めた。</p>

記載日：2023年11月25日

記載者：日本共産党根室市議会議員団 橋本 竜一

視察日：2023年11月22日(水) 13:30-15:30

視察先：福山市立常石ともに学園 〒720-0313 広島県福山市沼隈町常石 984-1

参加者：日本共産党根室市議会議員団 鈴木 一彦、橋本 竜一

：会派 紬 久保田 陽、須崎 和貴

：無所属 西田 浩一

(視察時は、各地から約20名程度の方々が一緒に説明を受けた)

対応者：福山市教育委員会学事課 企画研修担当次長 甲斐 真由子 氏

：福山市常石ともに学園 校長 甲斐 和子 氏

： 教頭 坂口 憲治 氏

： 教諭 福永 恭子 氏

視察内容：

- ① 常石ともに学園の紹介動画を視聴
- ② 校内見学
- ③ 質疑応答(別途の質疑応答を含む)



① 学校の紹介動画を視聴

内容の詳細は省略

② 校内見学



←家庭科室
 地域の方も対話する場として活用している。
 廊下もそうだが、天井の配管などはむき出しになっており、天井の内部がどのようになっているの
 か見えるようになっている。



職員
 の会議室←
 子ども達も活用している。



階段の踊り場に、児童のワールドオリエンテーション等の成果が掲示されている←→

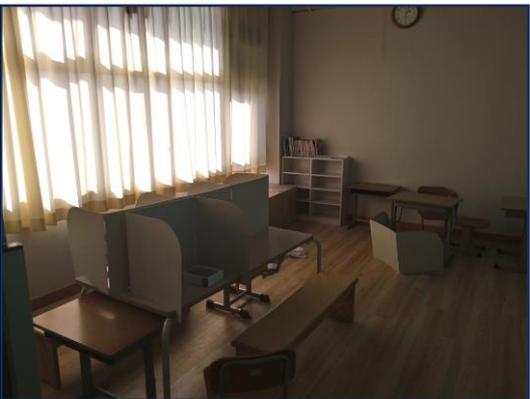


ヒマワリのタネを採取して、1世は84%の発芽。2世は発芽しなかったことを発見。ワールドオリエンテーションの取り組みを通じて、先生方はそこにどのような子ども達の「学び」があるのかを考える。

職員室はフリーアドレス



特別支援教室の様子←→
使用していないときは低学年の児童が使用する場合もある

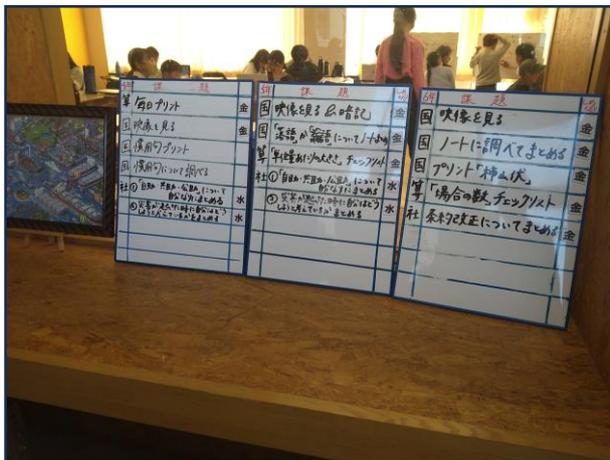
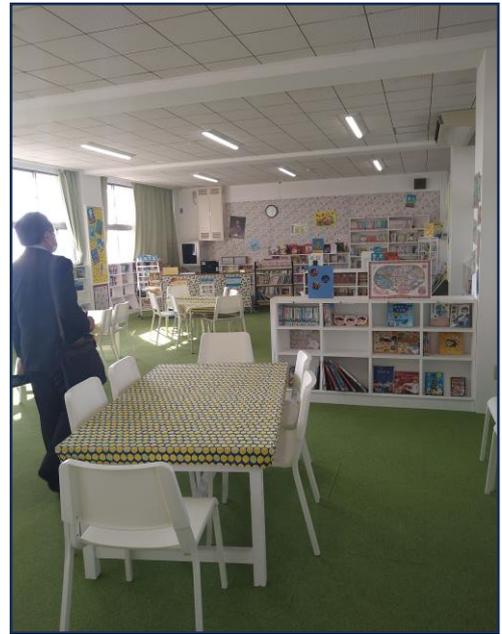


地元の業者の協力で学校の改装を行い費用を安く抑えられたそうです。



廊下側にも学習用のスペースがある。教室の壁がガラス張りなのは教員の目が届くようにするため

図書室は6年かけて福山市の全ての学校でこのように改装された。子ども達にとって居心地の良いスペースになっており、利用者数・貸出数も倍増している。



・特別支援学級と普通学級の交流・共同学習は他の学校よりは多い。ワールドオリエンテーションは完全に一緒に行く。午前中のブロックアワーも希望すれば一緒に国語、算数など学ぶこともある。ただ特別支援教室の場所で学ぶことを希望する子もあり、その子が一番希望する場所で過ごしている。ワールドオリエンテーションについても、「今日は特別支援教室でやりたい」という希望があれば、そのように対応している。

・上記の予定表にもとづいて、子ども達は独自に取り組む。進捗は先生方が子ども達の様子をみながら、課題や宿題などもおこなっている。

・司書教諭は配置されていない。午前中などの短時間勤務の「図書館補助員」が市内で40名配置され、1名で2-3校を掛け持ちしている。

③-1 各参加者から質疑応答（集団での応答）

Q) 通学する児童のうち地域内と地域外の割合は？

A) 高学年は旧常石小学校からの児童。低学年になると旧学区の児童が少ない。7割が学区外から通学。

保護者による送迎。公共バスで帰る子もいる。隣の尾道市からフェリーで通っている子も3名いる。

1年生30人の定員枠だが、抽選で定員枠を超えた。そのため抽選では一定の「市内枠」を設けている。



Q) もともとの学区内にいる子どもが抽選を外れて常石ともに学園に通えないケースがあるのか？

A) 昨年はそのようなケースはいなかった。なお、この近隣に想青学園（義務教育学校）が昨年に開校しており、現在この地域は想青学園の学区になっている。

Q) 低学年担当教諭が6名、高学年担当の教諭が4名いるが、学年で分担するのか、担当教科などがあるのか？

A) 1、2、3年生で算数をするなど教科で分担する形が多い。ただ入学した1学期は1年生を主に担当する教諭として分担する。子どもたちの状況に応じて、教員の分担を相談して決めている。

Q) 冒頭の紹介動画で「イエナプランそのままを導入するのではなく、常石ともに学園ならではの学びをしていきたい」とあったが、その意味は？

A) イエナプランはコンセプトであって、メソッドではないといわれる。私もオランダを視察したが、全ての学校での取り組み方は違う。イエナプラン校だが、本校ならではの「子ども主体の学び」に取り組んでいる。

Q) 例えばどのような点か？

A) 「主体的対話的な深い学び」として取り組んでいるが、子どもひとりひとりの学ぶペースや理解度や興味・関心に応じて授業づくりをしていこうと。3年生の教室でもいろいろな状況の子がいる。異年齢で学んでいくことも多様な学びの場の一つ。3年生だけの学習内容だけをやっていくのではなく、状況に応じた授業づくりをしていくために、教科や学年を超えていく状況になった。

またオランダでは特別支援学級は設置されていないが、保護者の声や子どもたちの要望をもとに考え、特別支援学級が必要となった。

Q) 先生方の力量や意識が重要だが、人事上での配慮は何かあるのか？ また教員への研修はどのようなになっているのか？

A) 特別な研修はしていない。ひとりひとりの子どもにあった学び、授業づくり、教材研究を中心として研修を本校でもおこなっている。着任時にイエナプラン教育の20の原則など理念は伝えるが、それらは教員として皆これまでも大事にしてきたことであり、新しいことではない。この環境を見ると新しい特別なことをやっているように見えるが、元に立ち返れば、これまでの学校と行ってきたこと変わりはないという意識をもっていただく。

Q) 何か県による人事上の配慮などはあるのか？

A) 5 学級で 5 人が定数だが、4 人加配されている。市内の教育は子ども主体の学びは同じであり、そうした研修を各学校でおこなっている。そのため単学年の教室よりも、異年齢のグループの方が「やりやすい」と感じている。

Q) カリキュラムの決め方はどうなっているのか？

A) 年間の計画はあるが、子ども達の実態をみながら、相談して決めている。

開校前の移行期間が 2 年あったが、ワールドオリエンテーションの内容によって、それぞれの国語や音楽、理科などを関連させながら午後の時間をどういうテーマで取り組むのかを決めた。午後のワールドオリエンテーションの時間が 200 時間くらいあり、その内容に組み込まれなかった時数を、午前中のブロックアワーに回している。

Q) 1 年生と 3 年生で時数が違うはずでは？

A) 下校時刻を 3 時に設定しており、標準の授業時数よりも多くなる。低学年は授業を行わずに自由な時間となる。高学年は 6 時間授業が週 2 回ある。

福山市ではエアコン設備が整ってから、夏休みを 8/1-8/31 までにしている。7/31 まで授業を行うため 6 時間授業が少なく、また授業時間にゆとりを持たせている。

Q) 子ども達がブロックアワーとして、自ら学習計画を立てるのは難しいのでは。

A) オランダのイエナプラン教育は毎週の初めに計画を立てるというが、実際には難しい。低学年ではその日ごとに計画を立てる。1 年間の課題の中で、進んだり戻ったりしながら、取り組んでいる。割り算の勉強をするときに、九九を学び直せる教材が同じ教室にあるので、その子が身につけていなければ、戻って学ぶことも出来る。高学年は 1 週間単位で計画を立てるが、子ども達の様子が常に変わるためにベストと言う形は無く、試行錯誤している。

Q) 実際の在籍数が 1 学年 30 人に満たない

A) 抽選後に辞退される方もいる。また特別支援学級に在籍する児童数も含めて 1 学年 30 名までとしている。

Q) 保護者からの意見は何か要望を聞く機会はあるのか？

A) 特別な機会はない。参観日の懇談や送迎時などにお話をするくらい。

Q) 改装費は？ またガラス張りの壁の意味は？

A) ガラス張りは校舎全体を多様な学びの場としており、廊下にいる子どもの様子も見えるようにしている。改装費用は地元の企業グループからの支援をうけた。設計は長野の大日向小学校・中学校と同じ事務所。

Q) 給食の時間では何か特徴はあるのか？

A) 給食センターからの配送であり、基本的には他校と同じ対応。すべて教室で食べる。

Q) 保護者や地域への説明について

A) コロナ禍で難しい部分もあったが、説明は実施してきた。地域がもともと学校に協力的で、長野に見学に行くなども行っていた。学校の方針や考え方をどのように進めて行くのかを一緒に考えていただいた。学校だよりや発表会、懇談など直接、子ども達が学んでいる様子を見ていただくなかで、理解を得てきた。

Q) 単元テストや通知表の仕組みは？

A) 学期末に期末テストを実施。国語算数理科社会の学期の内容がごちゃ混ぜになったテストを行う。評価のためではなく学びの状況を見るためのもの。理解できてない部分は子ども達自身も振り返りを行い、復習・練習を行う。期末テストをもとに学期末に個人懇談として3者面談を行う。通知表は数値による評価ではなく、1年の終わりに、記述文章での通知をしている。

常石ともに学園だけでなく、市内の多くの学校がこのような評価の方式に変わってきている。

③-2 各参加者から質疑応答（集団での質疑応答後に、希望者に別室で追加の質疑応答）

Q) 教職員の体制について。

A) 開校時は教育内容を作るために現在は4名の加配で1学級に2名配置しているが、今後は難しい。来年は高学年3クラスになるが、そのときに6名配置が可能か不明。もしかすると高学年は2学年で1名の加配になるかもしれない。

Q) こういった学校が地域に対してどのような影響を与えているのか？

A) 7割が旧常石小学校の校区外から通学する児童のため人の動きが増えた。コミュニティをテーマにいろいろな行事を行っており、運動会もみんなと一緒に作り、小さな子も高齢者も楽しめる運動会になっている。低学年が菌の探求をしているが、「催し」という場で発表するが、そのときに保護者や地域の方にもご案内している。子どもの学びを見ていただくことが地域の協力を得る大きな力になっている。授業につかう新たな畑を貸してくれるようにもなるなど、いろいろな面で協力をいただいている。子どもを中心に地域が元気になっているのではないかと感じる。

Q) 異年齢のグループ分けの時に何らかの配慮はあるのか？

A) 新入生は状況を把握できないが、2-3年生以降は固定にしているため、入学、進級、卒業のサイクルで1/3ずつ入れ替わる。

Q) 成果や課題はどのような点があるか？

A) 日々の授業をどのように作っていくか悩みながら取り組んでいる。上の学年はつまづいた時に学び直しができる。また下の学年は全て理解が及ばなかったとしても上の学年の内容に自然とふれていく。異年齢集団という環境の良さを活かしている。国語や算数も3学年で学ぶ内容（課程）が作れないものか、と考えている。「言葉」と「数」を中心に、3学年一緒になる学びを作ることを試行錯誤している。

管理者側は異年齢のなかで、先生方が子どもの状況をみながら、教科の学年の枠を自分自身の観念から取り払い学びを作っていくことに対応していることが成果と言える。先生方が授業の内容や

子どもの状況について、放課後をはじめ深く話し合える環境がある。

子ども達同士で教え合うことで「わかる」ことがある。その力をどう引き出していくことができるのか。そういう場面をどのようにつくっていくのかという点が問われている。

校長先生が常に各授業をチェックしながら、先生同士で動画やペーパーでも共有するようにしている。方向性も共有できるようにしている。「子ども主体の学び」や「興味関心に応じる」や「探求」などいろいろと概念はあるが、その具体例を授業の子どもの姿を通じて伝えている。これは常石ともに学園だけでなく、市全体の課題として取り組めるように、校長会の研修などを通じて、授業の共有で教育活動を進めて行くことを伝えている。教育長も授業づくりを中心に日々取り組んでいくことを伝えている。

Q) 公立学校でイエナプラン教育認定校として注目が高く、4人も加配されるなど特別な対応がされているが、広島県教育委員会や教育現場の全体中で、常石ともに学園とはどういう存在か？

A) イエナプラン教育を進める学校として発信するわけでない。異年齢による教育により、教科や学年の枠を超えて取り組んでいるひとりひとりの子ども達の様子が良く見える。子どもの姿を発信することで、他の学校の学びを促す役割となっている。今年度も常石ともに学園を研修の場として希望した市内3校が月1回授業を見ながら研修に取り組んでいる。そうした教育は常石ともに学園だから出来るわけではなく、各校で状況に応じながら、実現していくことが出来る。その研修を受けた3校がそれぞれ実践を図り、毎月校長研修集会等にペーパーで報告するなど、拡散させている。

Q) 文科省に提出する教育課程編成はどのように対応しているのか？ 何か特例的な対応となっているのか？

A) 通常の内容で認定となっている。移行期間に入る前に県がワールドオリエンテーションとブロックアワーのカリキュラムについて時数を算定した内容で提出している。それぞれの標準時数をクリアしている。4年前の元案から内容は毎年変わってきている。ワールドオリエンテーションの内容で理科の要素が抜けた場合、その代わりとなる理科の内容をテーマ設定している。

Q) 一学年の定員を30名とした理由。2名の教員が対応可能な児童数とそのぐらいということか？

A) 運動場をはじめとしたスペースの問題。教室も40名では机を並べるだけでいっぱいになる。

Q) 先ほどの説明があったように今後、加配の削減によりグループごとの担任の人数が減少した場合、先生方の目が届く範囲が限られることや、業務内容も煩雑になる可能性がある。その場合には今後、先生方のサポート体制等をどうするか課題になるのでは？

A) 日々の業務は体制が多いほうが良いと思うが、ここで行っている教育実践は先生ひとりで児童全員を見るという内容ではなく、子ども同士の力により「わかる」教育の環境を深めようとしている。先生が全ての対応をしなければならない、大人がいなければ授業が成り立たないとは考えていない。「大人が何もしないこと」も支援の一つと捉えている。

